



七英雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇

【Nコード】

N7784A

【作者名】

七英雄

【あらすじ】

時間・場所別々に突然死んでいく男女。だが全員が細い線で繋がっていた。その法則に科学では証明できない恐ろしい「何か」が動いていた。全30回の不思議な世界。

第1回 ミカ

ミカは暗い夜道を一人で家路についていた。

いつもの薄気味悪い道ではあるが毎日通っている。

そもそもこんな夜中に一人で道を歩くつもりはなかった。

恋人の家で甘い時間を過ごすはずだったのだ。

浮気の疑惑が発覚したので、そのことを追及した。

たまたま何気なく（この時点で確信犯ではあるが）触った携帯電話に知らない女の名前を見たからだ。

当然ながら、恋人はそんなことを認めるわけはなく、浮気している、していないの口論となった。

怒りのあまりミカは恋人の家を飛び出した。

送ってもくれない恋人に心の中で悪態をつきながらの帰り道。

絶対に浮気している。

盗み見た手帳にも携帯とは他の女の名前を見たのだ。

間違いない。

複数の女と浮気している。

明日再度追求してやろう。

手帳を奪ってやろう。

そして、女の名前を突きつけてやるのだ。

ふと気づくと、ミカの足音とは別の音が聞こえる。

ハイヒールのコッソ・コッソという音ではなく、ズズッ、ズズッと足の裏全体で擦り寄ってきているような音。

明らかに後を尾いてきている。

その音はまるでミカの動きに合わせているかのように、正確に、ミカの足音と同時に必ず向こうの足音が出る。

「嫌だ、変質者？」

怯えながらも、足音が続くようであれば怒鳴ってやろうと決めた。
今日の私は機嫌が悪いのだ。

過去にも痴漢の男を怒鳴り声だけで撃退したことがある。
今なら過去最高の声が出そうだ。

後ろの「誰か」はいなくなる気配はない。

苛立ったミカは堪りかねて心の準備をした。

そして、振り返った。

口から出たのは怒鳴り声ではなく、叫び声だった。

この瞬間、ミカの足音は永遠に止まってしまうことになった。

つづく

第2回 キヨミ

今日はキヨミの誕生日。

大好きなパパがキヨミの欲しかったぬいぐるみをプレゼントとして買ってきてくれる。

前からおもちゃ屋さんを通る度に欲しかった物だ。

ショーケースの前にへばりついて、怒られて引っ張られるまでみていたぬいぐるみ。

キヨミは欲しいとは何も言わなかったが、パパしつかりと見てくれていた。

誕生日前になると、パパが「キヨミはあのぬいぐるみだろう?。」と言ってくれた。

とても嬉しかった。

ちゃんとキヨミのことを理解してくれている。

キヨミのことをわかってくれている。

キヨミが欲しい物は、なんでもわかっているんだ。

キヨミは今日で5歳になる。

早くパパ帰ってこないかな。

待ちきれなくてキヨミはそわそわと家の中を動き回った。

「キヨミ、静かにしなさい」

遠くで声が聞こえる。

ママは台所で誕生日に出すご馳走を作ってる。

きつと大好物のハンバーグだ。

パパの帰りが待ち遠しい。

みんなで一緒に早くご馳走食べたいな。

キヨミは窓の外を見る。・・・?

何かが家の前に立っている。

パパかな？

いや・でも様子が変だ。
違う人だ。

黒い何かが・・物・・人だ。

「誰か」が立っている。

キヨミは「誰か」をじつと見る。
変な気分になった。

嫌いなピーマンを残すことができずに無理矢理口の中に押し込んだ
ような。

押し込まれたような。

吐き気のする気分だ。

瞬間「誰か」の顔が動いてキヨミと目が合った。

ドス黒い視線がキヨミの瞳に入ってきた。

キヨミの誕生日は同時に命日となった。

つづく

第3回 リュウジ

今日も奴を殴ってしまった。

あれだけ言ったのにも関わらず・・・だ。

金を持ってこない奴が悪い。

決められた金額を持ってこないからだ。

奴はちゃんと返事したんだ。

明日には持つてくると言っただ。

間違いなく持つてくると言っただ。

ならば返事の責任は奴にある。

嫌なら最初から断ればいいんだ。

俺がどんなに奴に凄んでも、どんなに脅しをかけても。

たったひとつ簡単なことだ。

嫌なら。

断ればいいんだ。

リュウジは自分のしていることを無理矢理正当化させていた。
教室で一人イライラしている。

金を持つてこないと、俺が上に怒られるのだ。

今日がそのリミットだ。

金を納めないとこっちが半殺しの目にあってしまふ。

金が足りない。

だから、奴の金がなければアウトなんだ。

あの野郎・・・。

なんで持つてこないんだ。

リュウジは舌打ちした。

簡単だろう。

金を作るのくらい。

親に頼めば貸してくれたりできるだろうが。

それでも駄目なら盗んでも持ってくればいいんだ。
まあいい。

また持つてこなければ殴るだけだ。
今度は金額も倍にしてな。

下校中。

リュウジの携帯電話が鳴る。

今まで一度も設定したことのない着信音だった。

着信を見ると奴からだ。

金の用意が出来たのか。

待たせやがって。

遅すぎるぞ。

疑うこともなくリュウジは電話に出た。

何かを喋ろうとしたその時。

顔面が蒼白になる。

意識が飛ぶ。

同時に電話機を地面に落とした。

リュウジの携帯電話は二度と本人の手に帰ることはなかった。

つづく。

第4回 ユキエ

ユキエが家に帰ると部屋の中は真っ暗だった。虚しさという言葉が重く部屋の中に落ちている。

静かだ。

静かすぎる。

ついこの前までは幸せだったはずなのに。幸せな将来のことまで考えていたのに。

同棲相手の男が出て行ったのだ。

男の方が浮気をして、大喧嘩したからだ。何の落ち度があるのだ？

ユキエは思う。

自分に女としての魅力がなくなったのか。

それでも、他の女へはしった男に怒りを覚える。

謝ってきても許すつもりはなかったのだが、謝るところか簡単に出て行った。

それはそれで悔しい思いを感じる。

どうせあの子と仲良くやるのだろう。

好きにすれば良い。

私は私の人生を進んでいくだけだ。

心に誓い、冷蔵庫から冷えたビールを取り出し、飲もうとした。

その時。

ザワツ。

悪寒が走った。

髪を洗っている時に、後ろに誰かいる気配を感じるアレである。同じ感覚にとらわれた。

何かの気配を感じる。

それはバスルームの中から感じた。

ユキエは寒気を覚えた。

身体が危険信号を発していた。

しかし、確かめずにいられない。

バスルームへと近づく。

距離が縮まるにつれ、心臓の鼓動が速くなる。

嫌な予感がする。

だが、止まらない。

止まりたくても勝手に身体が動いているのだ。

引き寄せられるように足が動く。

いなくなった男への助けを思いながらドアに手をかけて、開けた。

目の前が一瞬暗くなったかと思うと、その暗闇はユキエにとって永遠の間であることがわかった。

わかった時には。

既に。

遅すぎた。

つづく。

第5回 カズユキ

仕事がようやく終わってカズユキは背伸びをした。
急いで帰らなくては。

今日は5歳になる娘の誕生日だ。

手には欲しがっていたシリーズ物のぬいぐるみ。

毎日店の前で物欲しそうに眺めていた。

何が欲しいかと思えば、簡単にわかるほどのリアクションだ。
1万円もした。

キャラクター商品だ。

最近の玩具はこんなに高いのか。

心の中で舌打ちするも、娘の喜ぶ顔を思い浮かべると、どうしてもよくなってくる。

仕事のストレス発散をどうするのか、よく聞かれる。

まわりは買い物だとか、パチンコだとか、色々だ。

カズユキの発散は子供の顔を見ること。

娘の笑顔を見ているだけで、無邪気な会話を聞いているだけで、
それだけで一日の疲れが消える。

カズユキは車に乗り込み、発進させた。

10分くらいしただろうか。

後部座席に違和感を覚える。

何か異様な物の存在。

暗黒の淵へ落ちそうなこの世のものとは思えない憎悪の気。
何かがいる。

そんなはずはない。

発進する時は誰もいなかった。
何かがいる。

カズユキは身の危険を感じた。

だがスピードは落とさない。

いや・落とせないのだ。

ここで停まると最悪な何かが起こる予感がする。

家に向かって車は進む。

それでも、気になるカズユキはミラー越しに除くことを試みた。

ゆっくり視線を動かして。

ミラーを見る。

やはり予感は的中した。

うしろに。

何かが……。

「誰か」が……。

いた。

カズユキを乗せた車は勢いよく壁に激突した。

プレゼントのぬいぐるみは血に染まることになった。

つづく

第6回 コウジ

朝、目が覚めたら9時を回っていた。

時計を確認したコウジは慌てて起き上がった。

完全に遅刻だ。

今日は大学の仲間達で遊びに行くのだが、気になっている憧れの子も一緒ということで気合が入っていた。

たまたま、紹介されて、一目惚れに近いくらいの衝撃だった。

すぐに電話交換して、何度か電話し、誘ったりもした。

ガードはかたく、二人きりというわけにはいかなかった。

それで、こんかいのグループで遊びに行くこととなった。

最近付き合い始めた彼女とは早速喧嘩したばかりだ。

浮気なんてしていないのに、浮気したと問い詰められて頭にきたのだ。

「まだ」何もしていない。

向こうも「まだ」その気はない。

その後のことはわからないが・・。

そんなうるさい女のことはどうでもいい。

この日のために用意した服を出すためにクローゼットに近づいた。

事前にさりげなく聞いていた好みからチョイスした服。

今日でなんらかの返事をもらうように動いてみる。

その結果良し悪しで今の彼女と別れるかどうか考えよう。

瞬間。

背筋が凍るほどの悪寒が走る。

奥に「何か」いる。

「誰か」いる。

クローゼットの中に。

「誰か」が。

だが自分以外に誰がいるというのか。

今の今までそんな気配もなかったのだ。

コウジは構わず開けた。

不思議と驚きはなかった。

恐怖もなかった。

むしろ幸福感さえある。

このままこの感覚がずっと続けばいいと思った。

コウジは実現することのない幸福感をいつまでも感じていた。

つづく。

第7回 ハルキ

今日もまた殴られた。

金を持ってこなかったからだ。

バイトもしてない学生が、どうやって毎週1万円もの大金を作るこ
とが出来るといふのだ。

ハルキは怒りに震えながらもどうすることも出来ない力に苛立ちを
覚えていた。

元々が気弱に見える分、損をしていた。

不良どもに目を付けられるまではさほど時間はかからなかった。

いきなり呼びつけられて、金を要求された。

断ったら殴られた。

親には部活での傷だと言いつつ。

部活などやってはいない。

先生には階段で転んだと説明した。

明らかに殴られたものだといふのに、先生は当然のように納得し
た。

こんな学校なんで、もう嫌だ。

やめたい。

しかし、それよりも今は金だ。

足取り重く、ハルキは家路につく。

その間、最速の電話が鳴る。

電源を切ると、また殴られる。

無視すると、それでも殴られる。

一緒なら、電源を切ればいい。

ハルキは切った。

親に頼み込むか、それとも盗むか、ハルキは自分の部屋で考え込んでいた時、ドアをノックする音。母親だ。

ウザイ。

子離れできない親。

心配したように、呼びかける。

お前に俺の何がわかるってんだ。

話しかけるな。

いい加減にして欲しい。

だがハルキの頭の中では金のことであってか、ここは冷たくすることは出来ないと言算が働いた。

仕方なしに気のない返事をしてハルキはドアを開けた。

目の前に……「誰か」がいた。

良いことがある。

これからもうお金を渡すことはない。

悪いことがある。

これから1円たりともハルキはお金を見ることはない。

一生……。

永遠に……。

つづく。

第8回 刑事

刑事は机の上に投げてある書類を手に取り溜息をついた。
煙草に火をつける。

煙を吐き捨てるように吐いた。

書類に目をやる。

もう何度も読んだ書類だ。

再度手に取り、パラパラとページを捲る。

ウンザリしていた。

再度書類を投げた。

今度は手をのばしても取れないくらい遠くへ。

ありえない事件。

不可解な事件。

事故なのか、殺人なのかも見当がついていない。

7人もの男女が時間は違えどぼぼ日を空けずに死んでいったのだ。
それも調べてみれば・どこかで誰かが必ず繋がっている。

学校の同級生同士であるハルキとリュウジ。

ハルキは家で、リュウジは学校帰りの道で死んでいた。

彼らが通っている学校の教師とその娘。

キヨミとカズユキだ。

キヨミは家での心臓発作。

カズユキは帰る途中の交通事故。

その学校の卒業生のコウジ。

コウジの恋人ミカと昔の恋人ユキエ。
それぞれ、家で、そして外で死んだ。

事件性は全くない。

それもそのはず、傷ひとつないのだ。
交通事故のカズユキは別として。

しかし。

この死んだ彼らが、全てが細い糸で繋がっているのだ。
かといって何かの接点で死んだみんな全てにあるのか。
恐らく答えは「ない」だろう。

顔は知っているかもしれない。

名前も知っているかもしれない。

それだけだ。

それ以外につながるようなものはなにもない。

これは連続殺人なのか。

彼らの繋がりが狙われているのか。

他にも出てくるのか。

予想しようにもあまりにも多い選択肢を刑事は選ぶことなどできる
わけなかった。

つづく

第9回 ムツミ

あまりの突然のことに世界は変わった。

娘が楽しみにしていた誕生日。

お父さんを待ちながら、ウロウロしていた。
欲しかったぬいぐるみを持ってきてくれる。
落ち着きのない動きで騒いでいた。

しかし。

娘が窓から崩れ落ちるように倒れ、息をしていないことに気づくまでは時間がかからなかった。

パニックに陥ったムツミは夫に電話かけたが繋がらなかった。
車でも運転しているのだろうか。

呼びかけても身体をゆすつても娘は全く反応がない。

それが、既に手遅れだということには気づいていない。
それほど焦りが思考回路を消し去っていた。

病院だ。

ムツミは近くの救急病院に電話しようとした時。

電話が鳴った。

夫からかもしれない。

だが違った。

追い討ちをかけるように今度は夫の交通事故死の連絡。

娘と同じ日に。

なんという運命だ。

娘の誕生日という幸せの日に起こった最悪の出来事。

ムツミはもう生きていく氣力がなかった。

いや生きていたくても立ち上がって生活していくだけの力もなかったのだ。

死にたいと思った。

今なら強盗か何かに入られても抵抗することなく喜んで殺されるだろう。

今なら火事になっても喜んで焼け死んでいくだろう。

誰でもいい。

「誰か」

「誰か」

私を夫と娘の所へ連れて行って欲しい。

そんな時、玄関のチャイムが鳴った。

その音は、何処かへ行くための出発ベルのように聞こえた。

フラフラと歩き出した。

玄関へ向けて。

そして。

扉を開けた。

そこには。

「誰か」がいた。

つづく。

第10回 刑事2

刑事は思う。

そうだ。

考えれば簡単にわかることだった。
死んだ7人の中で唯一血縁関係なのはオカダカズユキとその娘キヨミだ。

他の人間はそういった関係はない。
ということは妻のムツミの身にも何かあつて然るべきだろう。
そんな可能性や根拠は、はっきり言つて何もない。
しかし、頼れる情報や僅かな確率はコレしかなかった。

刑事は素早く車に乗り込んだ。
渋滞に巻き込まれることもなくすんなりオカダ邸に辿り着いた。

家の敷居に入ると、異様な雰囲気圧倒された。
なにがあつたわけではないのだが、異様な空気を肌で感じた。

チャイムを鳴らす。
.....

誰も出ない。

もう一度鳴らす。
.....
出ない。

まさか外出？

こんな時にか？

いやそんなはずはない。

そんな女に見えなかった。

そんな非常識な女ではないはずだ。

葬式でのあの衰弱ぶりを見れば、あれで何処かに行こうという気には絶対にならない。

予想は当たったのだ。

何かがあったのだ。

何かに巻き込まれたのだ。

あるいは「誰か」に。

ドアに手をかけると鍵はかかってなかった。

今のこの物騒な世の中、鍵がかかっていない時点でおかしいではないか。

間違いなく事件の予感を感じた刑事は迷うことなくドアを開けた。

ゆつくりと開いていくドアの目の前には。

この世で一番おぞましい物でも見たかのような醜い表情で。
死んでいるムツミの姿があった。

刑事はヨロヨロと扉にもたれかかった。

「遅かった」と一言呟いた。

吐き気を覚え、口に手をやる。

瞬間。

身の危険を感じた。

気づいた時は。

「遅かった」

U
U
U
U

第11回 探偵

夜。

古びた街の奥にあるビル。

真っ暗になっていたところに明りがつく。

探偵事務所。

1人の探偵が疲れ果てた顔で帰ってきた。

探偵はイスにもたれながら溜息をついた。

突然依頼されたとはいえ、初めから気が進まなかった。

この一連の殺人・・事故と呼ばばいいのか、一度に7人もの男女が死に、死んだ親子の妻もまた死に。

更にはその場に居合わせた（？）捜査担当の刑事も死んだ。

計9人もの死体を出した。

調べれば皆何かの繋がりがあった。

刑事はどういう繋がりが？

事件担当していたからか？

ならば事件の真相を調べるように依頼された俺の命も危ないのでは？・・・と探偵は思った。

信じたくはないが、身体のどこかが告げていた。

「危険だ」と。

「関わっていけない」と。

長年の勘がそう告げていた。

呪い？

そんなものは信じたことない。

ありえないと思っている。

非科学では証明できないことは全く興味がない。
探偵はふんつとイスにもつと深くもたれる。

裏で何かの組織が動いている？

それこそ、突拍子もないことだ。

そんな大きな事になっているとしても。

死んでいった者達の共通な点がない。

生活も付き合いもバラバラなんだ。

それでも危険という気持ちがどうしても拭いきれない。

かといって根拠もない危険というだけで止めるわけにはいかない。

仕事はそんなに甘くないのだ。

だがどこから切り崩していけばいいのか。

何から調べていけばいいのか。

今の状況では思いも付かなかった。

探偵は分厚い資料を手にもう一度徹夜になることを覚悟した。

つづく。

第12回 ショウコ

ショウコが1人で遊んでいる時に、両親から聞かされた。
隣の家のキヨミが亡くなったと。

まだ幼いショウコには「死」というものを理解できていなかった。
キヨミが遠くへ行ったということしかショウコの親も説明できなかった。

仲良しだったキヨミちゃんが突然いなくなった。

なんで？

どうして？

わからないよ。

パパ、ママ、どうして泣いているの？

キヨミちゃんのパパとママも優しかったよ。

よく家に遊びにいったよ。

キヨミちゃんの家には色んな玩具があったよ。

いつもいつも遊んだよ。

キヨミちゃんと遊ぶのが楽しかったよ。

ショウコはキヨミの家に行くのがいつも楽しみだった。

もう行けないの？

何があったの？

ねえ、誰か教えてよ。

どうしてみんな黒いお洋服を着ているの？

どうして目の前にキヨミちゃんの写真があるの？

どうして？

キヨミちゃんは？

どこにいるの？

誰か教えてよ。

ねえ。

だれか。

だれか教えてよ。

「誰か」

シヨウコは誰かを渴望する。

キヨミの遺影の前でシヨウコはお願いした。

すると。

シヨウコの目の前に「誰か」が現われた。

あれ？

あなたはだあれ？

それはキヨミちゃんの玩具だよ。

いいの？

キヨミちゃんいないけど遊んでいいの？

あれ？

目の前が真っ暗だ。

見えないよ。

どうしたの？

どうしたの？

パパ？

ママ？

どこにいるの？

あたし・・・お迎えを待ってていいの？

じゃあ待っているよ。

早く来てね。

パパ。

ママ。

そのままシヨウコは永遠に遊びはじめた。

つづく。

第13回 ナツヒコ

静寂。

ナツヒコは誰もいない職員室でテストを採点していた。
だが集中できない。
できるわけない。
不可解だ。
理解できない。

オカダ先生が突然の交通事故死。
その奥さんと娘さんも原因不明の死亡。
発表ではいずれも心臓発作ということになっているが。
更に生徒2人もその学校を卒業した先輩も死んだのだ。
こんな身近でこんなことが起こるなんて。

何かがある。
普通では説明できない・何かがあるんだ。
ナツヒコは身震いをした。
気づくともう残っているのは自分だけだ。
気味が悪くなり、今日はここまでにして帰ろうと思った。
夜の学校はどうも不気味だ。

準備をしている時。
後ろで物音が聞こえた。
ナツヒコは驚いて硬直した。
よくよく音のした方を見ると。
採点していたテスト用紙の上に投げた赤ペンが転がったのだ。
転がっただけだ……。

そんなこと今まであったか？

ペンが転がるほど傾いていたか？

それよりも、あのペンは丸くはない。

そもそも転がるはずがないのだ。

？・・・・・・・・。

いや・・・・・・・・。

そうだ・・。

転がったのではない。

動いたのだ。

独りで動いていたのだ。

まるでペンに命が吹き込まれたように。

ナツヒコはペンの動いているのを何も考えずに見ていた。

そして「ひいっ」と悲鳴を上げた。

意識は遠のき、その場に倒れこんだ。

赤ペンが書いた「殺す」という文字をナツヒコは見ることはなかった。

つづく

第14回 エリ

タキガワナツヒコ先生が死んだ。
ざまあみろだ。

この私の告白を断ったからだ。

家の中、学校からまわってきた連絡網を聞いた。
エリは一人で笑みを浮かべる。
煙草に火を点け、ふうつと煙を出した。

何が教師と生徒だ。

何かもっと自分を大事にしろだ。

最初に遊び半分で手を出してきたのは向こうの方だ。
言い寄ってきて、半ば無理矢理私を抱いた。

何度も、何度も、その内私もまんざらでもなくなってきた。
タキガワに対しての気持ちもはつきりわかってきた。

だがそれをこっちが本気になったらすぐに手の平を返すのか。
断るどころか、別れ話。

もう会うのはよそう・・・だと？

勝手すぎるじゃないか。

ならば初めから手を出さなければいい。

私以外にも同じような生徒を抱えていたくせに。

もしかするとその内の「誰か」がタキガワを殺したのかもしれない。
礼を言いたい。

よくぞ殺してくれた。

だが私には関係のないことだ。

勝手に捕まればいい。

先日死んだハルキとリュウジも関係ないことだ。
オカダ先生も関係ないことだ。

周りには何か不思議なことが起こってるようなことを言ってる。
確かにおかしいようなことが起こっているのはわかる。

同じ学校内で同時期に4人も死人が出るなんて。
だが、偶然だ。

そうに決まってる。

そんな映画みたいな話あつてたまるか。

エリは煙草の火を消し、何事もなかったように学校へ向かった。

つづく

第15回 探偵2

オカダカズユキの同僚であるタキガワナツヒコが職員室で死んでいたそうだ。

テストの採点中だった時の心臓発作。

そこまで苦しんだわけではないらしく、赤ペンなどが転がっていただけで、他の物は酷く散らばっていなかった。

格闘の跡もない。

明らかに事故だ。

誰がみてもテストの採点中に突然苦しみだして、一人だったため助けも呼べず、そのまま亡くなったようにか見えない。

本来ならば、事故だ。

事故としてとられるだろう。

だが探偵はそうは思わなかった。

死んだタキガワ先生はオカダ先生と同じ学校だったのだ。

そして、2人の生徒も同じ学校。

事故ではない。

これは今までの延長だ。

奇妙な出来事。

どうということなんだ。

連続殺人人には不規則過ぎる。

親子を狙って、同級生、恋人、統一性が全くない。

探偵は学校へと車を走らせた。

とりあえず現場へ向かおう。

今日もさすがに授業はないだろう。

校長先生のお話で休校だ。

喜びのせいか生徒の足取りも軽い。

家に帰ってから、遊びのことでも考えているのだろう。

自分たちの学校での連続の死。

もしかしたら、今度は自分かも・・・という発想はないのか。

なぜ笑顔で登校できるのだ。

ふとある女子生徒が探偵の目にとまった。

色気のある茶髪の女。

どこことなく社会に突っ張っているような態度が遠くからでも見て取れる。

女子生徒は突然しゃがみこんだ。

何の前触れもなく。

探偵には倒れるように見えた。

探偵は思わず車から飛び降りて女子生徒へ駆け寄った。

つづく。

第16回 エリ2

エリは学校へ向かっていた。

今日も休校になる。

嬉しい。

こんな事件が起こって良かったなあ。
だって授業受けなくていいのだから。

今日は何処へ遊びに行こうか。

買い物でも行こうか。

カラオケでも行こうか。

それともナンパされるために街でウロウロしていようか。

そう思っていたエリの急に足が止まる。

目眩がした。

クラツと身体が歪む。

体勢を立て直したかと思うと。

今度はふいに目の前が真っ暗になったのだ。

何が起こったのかわからない。

目をこするが暗い。

何度も確認をする。

間違いない。

闇だ。

目を開けている。

閉じてはいない。

目を開けているにも関わらず。

目の前が暗闇で包まれているのだ。

不安になってエリはしゃがみこんだ。

目は開いている。

間違いない。

暗闇だ。

真っ暗だ。

ザワザワと他の生徒達の声がする。

話しかけたりする者はいない。

エリの身体を気遣う者もない。

「おい大丈夫か？」

突然オヤジの声がする。

身体を激しく揺すられる。

クソが。

私のこの綺麗な身体を汚い手で触るな。

ためーみたいなの、オヤジが触っていいわけないだろう。

エリはそう思いながら、その手を振り払おうとしたが、うまくいかない。

頭の中はパニックになっていた。

「おい。おい。」

構わずオヤジは揺する。

もう触るな。

どこかに行け。

エリは更に跳ね除けようとしたがそのまま身体は大きく回転して倒れた。

頭に衝撃が走る。

目の前が、一瞬明るくなったが、後に残ったのは永遠の闇だった。

つづく

第17回 シンジ

家の中。

部屋の中。

布団の中。

シンジはガタガタと震えていた。

ここ2・3日学校に行っていない。

無断欠席している。

突然。

あまりにも突然な出来事だった。

同級生が2人もいきなり死んだ。

2人はいわゆるいじめっ子・いじめられっ子の関係だった。

何がどうなってこんなことになるのか。

どちらか1人であれば納得がいく。

いじめていた奴が無茶したか、いじめられていた奴が無茶したかのどちらかだ。

事件性がはつきりする。

だがどちらでもない。

2人が死んだのだ。

それもほぼ同時に。

わからない。

誰が動いたのか。

どうなったのかわからない。

シンジは恐かった。
なぜなら。

シンジも一緒に金を脅し取ってた仲間だったからだ。
この死んだ2人の関係に關与していたのだ。

シンジも部類で言えば、いじめっ子の部類だった。
次は自分の番じゃないのか？

自分の身になにか危険が降りかかるのではないか？
誰が学校なんかに行くものか。

シンジが布団に潜り込んでいる間。

キイ・・・。

ドアが開く音がした。

身体が恐怖で動かなくなる。

ミシ・・・ミシ・・・。

近づく音。

まさか。

まさか！

「シンジ・・・？」

心配そうな女の声が聞こえた。
母親だ。

シンジは安堵した。

脅かせやがって！

怒りがわいてくる。

「うつせよ！」

シンジは睨みを効かせようと布団から飛び出た。

だが。

目の前にいたのは母親ではなかった。

つづく

第18回 私

私はゆつくりと歩いていた。

行く先は決まっている。

進む先は決まっている。

できることなら行きたくない学校へと向かっていった。

また皆のいじめの対象にされるのが嫌でたまらなかった。

途中オカダ先生の家を通り過ぎる。

丁度、家を出て行こうとしてるところだった。

いつも仲の良い家族。

小さい女の子と美人の奥さん。

オカダ先生は幸せそうな顔してる。

羨ましい。

その幸せが少しでも私にあれば。

学校でのオカダ先生の評判は悪くない。

生徒のことを優先に考える良い先生と知られている。

確かにそうだ。

確かに「皆」にはそうだ。

でも私と目が合うとオカダは何も言わず無視する。

それもそのはずだ。

私の身体をキズモノのしたのはオカダ本人だ。

自分から襲ってきていて。

自分が勝手に私を欲しがって。

自分が勝手に起こした行動なのに。

何故私を無視するのか。

私が悪いのか。

私が何をした。

私が誰かに喋ったか？

何も私から誘っていない。

初めはオカダからの行動なんだ。

たまたま二人きりになった時があった。

遅い時間。

いじめに遭っていた私の相談に乗ってくれていたのだ。

その時は。

その時まで。

生徒のこと考えてくれる先生だと思っていた。

でも、目の色が変わったオカダは突然私に襲い掛かった。

それから何度も私は犯された。

何度も。

何度も。

ことあるごとに相談に乗るフリをして。

遅い時間まで残されて。

何度も。

何度も。

逆らうことはできなかった。

そんな屈辱が何日か続いた時。

教室でいつもように無理矢理犯されているのを同じ教師のタキガワ先生に見られた。

つづく。

第19回 私2

タキガワ先生は優しかった。

そのことを見たといつて学校側にも何も言わなかった。

オカダにも何も言及しなかった。

オカダはその件以来、私には手を出すことはなくなった。

今思えば。

そのことをいつかどこかで誰かに言われることを恐れて私を無視していたのだろうか。

タキガワ先生は何も詳しく聞かなかった。

なにより私のことを、私の気持ちを最初に考えてくれたのだ。傷ついた私を守ろうとしてくれていた。

私の心タキガワ先生が入り込んできた。

タキガワ先生のことしか頭にないくらい想うようになっていった。

タキガワ先生と本気で相談しあつて、色々と解決策の話をしました。私とタキガワ先生が愛し合う関係になるまで長い時は必要としなかった。

幸せな日々が続く。

この人と一生、一緒にいたいと心の底から思つた。だがちょうど学校内で二人いるところを同級生のリュウジに見られた。

リュウジは本当に腐った奴でそれをネタに私を脅してきた。

学校に告げ口すると。

それが嫌ならば……。

結局……。

金とあわよくば私の身体が欲しいのだろう。

タキガワ先生には言わずに私の方に言ってきたのはそういうことだ。世の中自分のことしか考えない奴が多すぎる。

私はリュウジの先輩であるコウジさんに相談を持ちかけた。

運良くコウジさんとは顔見知りだった。

コウジさんの言うことなら、リュウジの馬鹿も仕方ないと思うだろう。

だが。

男という生き物は。

タキガワ先生以外の男は。

ケダモノだと確信した。

コウジさんもただのケダモノだった。

つづく

第20回 私3

コウジも私の身体が目当てだったのだ。
私自身はそうは思っていないが。

私の容姿はかなり魅力があるみたいだ。
その容姿と元々暗い性格なのが災いして、いじめを受けるとい
うことになった。

特に女子のいじめは酷いものであった。

リュウジの件をなんとかするからやらせろとコウジは言った。
断ったが、コウジは引き下がらない。

しつこすぎる。

逆にバラすと脅された。

なんて奴だ。

頼ってきた弱い女を反対に脅すなんて。

仕方なしに。

抱かせてやった。

とりあえずリュウジのことはなんとかなるかもしれない。

コウジとはこれからも少し続くのだろう。

そう思うと憂鬱になってきた。

私は必死だったのだ。

タキガワ先生との仲を終わりにしたくない。

バラされたくない。

タキガワ先生に迷惑をかけたくない。

私は先生の傍にずっといたいのだ。

永遠にいたいのだ。

卒業式に告白しよう。

きっと受け入れてくれる。

いや・卒業式まで待てない。

今だ。

今が大事なんだ。

私は覚悟を決め、タキガワ先生のところへ行こうと足を速めた。
嫌なことは忘れたい。

今、告白しよう。

きつと受け入れてくれる。

そしたら学校なんて行かなくていい。

私が先生の面倒を見てあげるのだ。

掃除も。

料理も。

なんでも私がしてあげるんだ。

タキガワ先生の胸の中で幸せを感じたい。

私は迷わず先生の家への道を足取り軽く歩く。

タキガワ先生の家に行く途中にある交差点は信号が見えにくいいため、よく事故を起こす場所です。有名な交差点だった。

私は横断歩道を渡る。

私の中では信号は青だった。

私の心は青だった。

しかし。

心躍る私の瞳に赤信号は見えなかった。

つづく

第21回 私4

どがん。

全身が揺れた。

実際そんな擬音が鳴ったかというのは疑問に残るが、私の身体が宙に浮いた。

ふわっと。

気持ちのいい浮遊感を感じる。

宙に浮いた私の身体は。

そのまま地面に叩きつけられるように頭から落ちた。ぐちゃ。

変な音が響く。

同時にジワジワと痛みが出てきた。

車に撥ねられたみたいだ。

意識はしっかりある。

慌てて飛び出した運転手の呼びかけにも反応できた。

だが身体が動かない。

感覚的に私は悟った。

このまま死んでいくのだろうと。

これが死ぬということなのだろうと。

結果的にそれは正しい分析だった。

意識がどんどんなくなっていく。

私は眠るように目を閉じた。

暗い……。

闇……。

暗闇……。

タキガワ先生は悲しんでくれるだろうか……。

私の人生なんだったのだろうか。

いじめられ、弄ばれて。

ようやく安らぐ人を見つけたと思ったのに。
許せない。

許すことは出来ない。

憎しみが増加する。

私の意識はもうこの世には存在していなかった。

私は死んだ。

闇に包まれ・・・・・・・・。

どれだけの時が経ったのだろうか。

あるいは一瞬の時だったのだろうか。

気がつけば・・・・・・・・。

オカダ先生の家の前にいた。

幸せな家庭。

憎い。

窓から女の子が覗いてる。

オカダの娘だ。

幸せな家族。

女の子は私を見つけた。

女の子は私を見ている。

じつと。

憎しみが増加する。

何を見ている！

私は女の子を睨んだ。

女の子は驚きもせず倒れた。

つづく。

第22回 私5

憎しみが増加する。

この世の憎しみ。

まわりの憎しみ。

自分を死へと導かせた憎しみ。

気がついたら車の後部座席にいた。

目の前はオカダが座って運転していた。

傍には大きなヌイグルミがある。

子供の物か。

何かのプレゼントか。

誕生日か。

いい気なものだ。

私を弄んで。

犯して。

自分の性欲だけを満たして。

後は知らないということか。

私が死んだことには何とも思わず。

家庭のことだけを考えているのか。

憎い。

憎い。

憎い。

憎しみが増加する。

一瞬。

後ろの気配を感じたのだろっ。

ミラーからオカダが後部差席を窺った。

何を見ている！

私はミラー越しに睨んだ。

オカダの意識が遠のき、そのまま車が激突し、炎上した。

私はどこへいくともわからず。

憎い気持ちがある場所へ。

憎い人がいる場所へ。

気がついたら暗い夜道に立っていた。

前方に女が歩いている確かコウジの女だ。

コウジの家で犯されている時に写真が立ててあるのを見た。

この女さえちゃんとしていたら。

私は……。

こんなことにならなかった。

他の女に手を出すほど、満足してないということだ。

この女さえ……………。

憎い。

憎い。

憎い。

憎しみが増加する。

私は女の後を付いていった。

私の気配に気づいたのだろう。

女の足が早まる。

途中で足が止まる。

意を決したように女が振り返った。

目には強い意志が感じられたが、それはすぐ絶望に変わった。

何を見ている！

私は睨んだ。

そして襲い掛かった。

つづく

第23回 私6

気がついたらどこかの中にいた。

タンスかクローゼットの中だ。

何者かがゆつくり近づいて、ためらいがいちに開けた。

コウジだった。

意外な表情を見せた。

なんでいるんだ？と言わんばかりの。

信じられないという顔

こんな奴に犯されたなんて。

こんな間抜けな顔の奴に襲われたなんて。

こんな奴に私の全てを見られたなんて。

あの時の邪悪な笑顔が忘れられない。

あの時の卑猥な言葉が頭から離れない。

憎い。

憎い。

憎い。

憎しみが増加する。

私はコウジの顔に触れた。

魂を抜き取った。

すうう・・・とコウジの口から何かが出た。

これが魂なのだろう。

コウジは恍惚な顔をして。

更に邪悪な笑顔のまま崩れ落ちた。

気がついたらお風呂場の中だった。

何処だ？

女性が住んでいるような感じがする。

いきなりドアが開け放たれた。

女の驚く顔。

私はなりふり構わず襲い掛かった。
相手の女も声を出す暇もなかった。

気がついたらリュウジの声が聞こえてきた。

携帯で話しているようだ。

私はそのまま呪いの言葉を放ち、襲い掛かった。
携帯電話が音を立てて地面に落ちた。

気がついたら再びオカダの家の前に立っていた。
オカダの管理をちゃんとしていなかった妻に対しても憎しみが増加した。

玄関を開けた妻に襲い掛かった。

しばらくすると警察の男が一人慌ててやってきた。

私のときにもっとよく調べれば、何かわかったのではないのか。
私は襲い掛かった。

全部。

全部だ。

全部に私は襲い掛かった。

つづく

第24回 私7

ショックだった。

こんなショックなことはない。

タキガワ先生はエリという女子生徒とも関係があった。

それだけではない。

誰とも関係を持っていたのだ。

私が特別ではなかった。

私も結局そういう扱いだったのだ。

都合の良い女の一人だった。

一番じゃなかった。

悲しかった。

怒りも芽生えた。

憎い。

憎い。

憎い。

憎しみが増加する。

全てが憎い。

殺してやる。

殺してやる。

教室でタキガワに襲い掛かった。

エリにも襲い掛かった。

私の後に出てきて。

調子に乗っている女だった。

この女がタキガワを誘惑したのだ。

きっとそうだ。

憎い。

憎い。

憎い。

憎しみが増加する。

殺してやる。

殺してやる。

エリに襲い掛かった。

リュウジが私のことを誰かに話してるかもしれない。

私の名誉に関わる。

リュウジの知り合いは全て殺す。

憎い。

憎い。

憎い。

憎しみが増加する。

殺してやる。

コウジも誰かに話してるかもしれない。

私の名誉に関わる。

コウジの知り合いは全て殺す。

憎い。

憎い。

憎い。

憎しみが増加する。

殺してやる。

オカダの関係している人間もだ。

真に悪なのはオカダなのだ。

憎い。

憎い。

憎い。

憎しみが増加する。

殺してやる。

それを邪魔する警察もだ。
調べるべきは私ではない。

憎い。

憎い。

憎い。

憎しみが増加する。

殺してやる。

全て。

全てだ。

関わる奴を全て殺してやる。
全員殺してやる。

つづく。

第25回 探偵3

なんてことだ。

見落としがあった。

探偵はいきなり思いついた。

7人もの突然死とそれに続く死。

もはやそれは事件と呼ぶにふさわしい死。

そこだけに集中していた。

調べる時も死んだ人間だけを調べていた。

極めて細い糸で繋がっている程度で、何も確信することはできなかった。

だが、誰が、決めた？

この7人の事件が最初だと誰が決めたんだ？

この7人から全てが始まったと誰が決めたんだ？

もしかしたら。

そう、もしかしたら。

その前にも同じようなことがあったかもしれないではないか。
同じような理解不能な死があったのでは。

その前を調べることを探偵は怠っていた。
自分自身に舌打ちする。

自分に喝を入れて、探偵は調べ直した。

7人の事件から2・3ヶ月前。

すると。
出てきた。

女子生徒が一人、交通事故死していたことがわかった。
赤信号の飛び出し。

信号確認をしなかったための事故。

自殺でもない、完全なる事故である。

本当に事故か？

本当の始まりはこの女子生徒の死からではないのか？

探偵は長年の直感で思った。

更に遡ったがその前には何もない。

事故も何もこの辺りでは起こってないのだ。

ここに何かがある。

当時は事故として簡単に処理されたのだろうか、今となってはそうもいかない。

この死にも何かある。

探偵は死んだ女子生徒のことを調べようと決めた。
たとえそれが危険なことでも。

つづく。

第26回 母

静まりかえった暗い部屋。

あの子がいなくなつて。

もう3ヶ月経つ。

もうそんなに経つの？

まだ線香の香りが部屋の中に充満している。

この匂いも心地よいものになってきた。

慣れることはこういうことだ。

でも今は身体が動かない。

動かそうともしない。

立ち上がる気力もない。

あの子はいないの？

もうこの世にいないの？

いなくなつたの？

私の前から……。

いえ。

いいえ。

そんなことはない。

そんな子じゃないわ。

いる。

いるわ。

気配を感じる。

あの子を感じる。

娘を感じる。

いる。

いるわ。

あの子は間違いなくいる。
間違いなくどこかにいる。

そうよ。

あの子は生きている。

死んでなんかいるものか。

死んでるわけない。

私の子がそんな簡単に。

あっけなく死ぬわけない。

この度の事件・事故。

最近ニュースを賑わしている不可解な死。

全てに娘が関わっている。

絶対に関わっている。

感じるのだ。

わかるのだ。

あの子を感じる。

あの子の存在を。

もっと感じていたい。

だからこそ探偵に調査を依頼した。

その調査報告書を読むだけであの子を感じることができる。

早く情報を持ってこないだろうか。

早くして欲しい。

早く来て欲しい。

早く。

早く。

早く。

早く。

あの子が死ぬなんておかしい。

信じられない。

きっと何かの間違いだ。

娘は悪者に巻き込まれたんだ。

意図的に狙われたんだ。

娘は殺された。

いえ・死んでない。

死ぬわけがない。

でも、殺された。

犯人がどこかにいる。

いえ・娘は生きている。

いえ・。

でも・。

いえ・。

でも・。

つづく。

第27回 探偵4

馬鹿な。

そんな。

なんてことだ。

こんなことが。

死んだ女子生徒は。

俺の依頼人の娘だった。

どういうことだ？

なぜ？

確かに依頼を受けた時には若干の怪しさを感じたが。

暗いのは元々のものかもしれないが。

闇の世界へ魂が向かっているようなそんな雰囲気を感じた。

まさか。

自分の娘が事故で死んでいたなんて。

だがおかしい。

普通ならばその事故を調べるように依頼するものだろう。

それが全然関係ない調査。

今まで死んだ、7人の調査なのだ。

明らかにおかしい。

気でも狂っていたのか。

何がどうなっているのか。

それとも、俺がこの事実に向き着くことを見越していたのか。

ゾクッ。

探偵の背後にかつてない寒気が走る。
思わず振り返った。

そこには一人の俯いた女が立っていた。
視線だけはじつと見つめて。

探偵だけを見つめて。

その視線が外れることはなかった。

まるで獲物を狙う目。

憎しみに満ちた目。

人を殺した目。

恨みの目。

全ての者を殺そうとする目。

探偵はよく見る。

はっ・・・と。

驚愕する。

この女は。

交通事故で死んだ女子生徒だっ！

あの依頼者の娘だ！

しかし・・・ありえない。

この世にいることはありえない。

死んだんだ。

死んだのだ。

今、この場に、いることが、ありえない。

ということとは。

ということとは。

つまり。

つまり！

この女は！

この女が！

今までの・・・・元凶？

つづく。

第28回 私8

コソコソと嗅ぎ回っていたのはこいつだ。

このオヤジだ。

何を調べている。

私のことか。

私の過去か。

私の知られたくない昔のことか。

私が誰に犯され、誰に騙され、そして、どんなに惨めに死んでいったことを調べているのかっ！

調べてなんになる。

何がわかる。

何かできる。

くっ・・・ふっ・・・。

くふふふ。

うふふ。

私を一目みて理解したようね。

私は何者なのか。

どうしてここにいるのか。

自分に何をする気なのか。

あの怯えた顔。

恐怖の顔。

今にも逃げ出したい顔。

少しずつ、足が後ろに下がっていつている。

でももう遅い。

逃がしはしない。

勝手に私のことを調べやがって。

憎い。

憎い。

憎い。

憎しみが増加する。

殺してやる。

殺してやる。

殺してやる。

・・・。

何を言ってる？

私のお母さんに頼まれた？

くくく・・・うふふ。

あははははは。

それがどうした！

私は襲い掛かった。

オヤジは恐怖に引きつった顔を浮かべて倒れた。

息苦しいのか、何度も胸を掻き毟りながらバタバタと暴れている。

まるで虫みたい。

くふっ・・・くふふ。

ぴくぴく痙攣をしていたが、やがてそれもおさまり、静かになった。

死んだ。

魂は闇へと向かったのだ。

ざまあみろだ。

それにしても・・・あのババア。

私のこと調べさせてなんになる。

ふざけやがって。

憎い。

憎い。

憎い。

憎しみが増加する。

殺してやる。

殺してやる。

殺してやる。

今すぐ殺してやる。

うへ。

第29回 母2

ああ・・。

ああ・・。

感じる。

感じるわ。

くる。

くるわ。

あの子がくる。

あたしに会いにくる。

やっぱり生きてた。

生きていると思ってた。

あたしの思ってた通りだ。

死ぬわけがない。

あの子が死ぬわけがない。

どこ？

どこにいるの？

お母さんはここよ。

女手一つで育ててきた。

たった一人の可愛い子。

早く会いたい。

あの探偵さんがきつと見つけてくれたんだ。

良かった。

高いお金を払っただけあるわ。

早く。

早く。

早く。

会いたい。

どこにいるの？

台所？

どこにいるの？

居間？

どこにいるの？

玄関？

どこにいるの？

もしかしてお風呂？

どこにいるの？

もしかしてトイレ？

どこにいるの？

ああ・そうか。

自分のお部屋ね。

さあ、出てらっしゃい。

お母さんよ。

ああ・・。

いた・・。

お母さんよ。

よく・よく生きててくれてたわね・・・・。

お母さんよ。

何怒っているの？

そんなに怒らないで。

もう、うるさく言わないわ。

生きていてくれただけで。

お母さん幸せよ。

もうずっと離れないわ。

ずっと一緒よ。

どこか静かなところで暮らしましょう。

こんな場所からは早くいなくなりましょう。

あなたの好きな場所でいいわよ。

ねえ、決めて。

どこにいくの？

あの暗い道の先はどう？

奥の奥の闇はどう？

永遠にずっと・・・。

ずっと・・・。

ずっと一緒よ。

早く行きましょう。

私を早くあの闇へ連れて行って・・・。

つづく

次回最終回。

最終回 カナコ

エリが死んだ。

どうやら心臓発作だったらしい。
学校に向かう途中のことだった。
そんな身体の弱い子だったか？

最近相次いでこんなことが起きている。

気にしないけど。

自分は大丈夫だ。

カナコは思った。

エリが死んだ。

良かった。

死んでくれてラッキーだ。

ウザイ奴が死んでくれた。

これでアキヒコは私の物だ。

私がエリなんかに負けるはずはない。

あの子はタキガワ先生とも遊んでいたのだ。

それだけではない。

ほとんどの男と関係を持っていた。

そんな女にアキヒコもよく付き合っていたものだ。

確かに可愛いかもしれないが、あんなヤリマンな女のどこがいいのか。

カナコはアキヒコの家に向かっていた。

これで今日から私がNO.1だ。

しばらく進むと・・・。

目の前に誰かが立っている。

「誰」だ？

女・・・。

女の子・・・？

カナコはゆっくりと通り過ぎようとした。

近づくにつれ、どこかで見ることがあるように思えた。

同じ学校の生徒だったような。

女の目が、かっと見開いた時、カナコはそれが「誰」だかわかった。

「あつ」

・・・と気付いた時には、もうこの世の人間ではなくなっていた。

「闇」 完

皆さん。

初めまして。

この度は小説、読んで頂きありがとうございます。
いかがだったでしょうか。

終わり方もあえて、ああいう終わり方にしました。
救いのないような終わりです。

毎日仕事のことなどで、「救われない」という思いから書き始めた
のですが。

結果的には「救いのない」結末でした。

ああ・やっぱりって感じです。

ホラー系でモチーフは「呪怨」です。

そのままじゃないか！という声を厳しく受け止めますけど。

30回もよく書いたなと我ながら思いました。

まだまだ未熟者ですけど。

頑張ってこれからも書いていきますのでよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7784a/>

闇

2010年10月12日04時02分発行